伝統と改新―今出川キャンパスの１４３年

キャンパスめぐり隊	小枝　弘和〔こえだ・ひろかず〕
案内人紹介	同志社社史資料センター社史資料調査員

はじめに

２０１９年６月７日（金）にキャンパスめぐり隊を担当しました。当初は、現存する建物を見学しながら、伝統と改新が生じた理由を参加者と一緒に考えることを予定していました。しかし、当日荒天であったことから同志社礼拝堂でのレクチャーに変更となりました。そのレクチャーの概要は次の通りです。

キャンパスをみる視点

図１のグラフは、同志社諸学校に在籍した総在籍者数を表しています。集計は年度末に行われた数字で、同志社の創立から戦前の１９２９（昭和４）年までの総在籍者数の推移を示しています。創立１年目の１８７５（明治８）年６月ごろの在籍者数は12人で、新島襄が永眠した１８９０（明治23）年６月ごろは７３４人が在籍していました。その後10年間は徴兵令への対応やアメリカン・ボードとの関係をめぐる問題があり、生徒数は減少していますが、１９００（明治33）年ごろを境に再び増加します。特に１９１２（明治45）年には専門学校令による同志社大学が、１９２０（大正９）年には大学令による同志社大学がそれぞれ開校し、在籍者数が増えています。ちなみに、１９１２年は８６０名、１９２０年は１８１２名、１９２９年は３６７３名と在籍者数は急増しています。

図２のグラフは、戦後の同志社大学（旧制を含む）に限った在籍者数です。新憲法下で施行された学校教育法に基づき新制同志社大学が発足した１９４８（昭和23）年の在籍者数は２６２７人ですが、20年後の１９６８（昭和43）年は２万１２９６人と、およそ８倍に増えました。さらに20年後の１９８８（昭和63）年は２万１００人と、グラフからもわかるように生徒数の大きな増減はありません。しかし、さらに20年後の２００８（平成20）年は２万５８０５人、そして、10年後の去年、２０１８（平成30）年は２万９３２２人と増加しました。

この２つのグラフから、１４３年間のおおよその学生数変遷の概要がわかります。そして、同志社の歴史の早い段階で建築された建物が、残るだけで特有の価値を有するようになっていくことが想像されます。事実として、同志社の歴史の初期に建設された建物が複数棟現存し、学校の歴史を雄弁に物語る存在であることは、キャンパスをご覧いただけば一目瞭然です。しかし、一方で、古い建物は、増加する学生を収容するだけのキャパシティを持ちえません。また、進歩する科学技術が古い建物の機能を陳腐化させるという致命的な弱点を持っています。

この狭隘化と機能的な陳腐化のうち、狭隘化が顕著となった原因の一つに、１９５６（昭和31）年に施行された法律「大学設置基準」が挙げられます。この法律の第37条には「大学における校地の面積（附属病院以外の附属施設用地及び寄宿舎の面積を除く）は、収容定員上の学生一人当たり十平方メートルとして算定した面積に附属病院建築面積を加えた面積とする。」とあり、ざっくりと学生一人あたり10㎡の敷地を有することが大学に必要とされました。戦前の同志社は、土地を追加購入することでキャンパスを広げ、また離れた場所に土地を購入して新しいキャンパスを開設することで、在籍者数の増加に対応してきました。しかし、戦後の経済発展に伴い、田畑が住宅や工場などに取って代わり、近場で土地を新たに入手することが困難になると、戦前の手法は使えません。また、戦後は高度経済成長に呼応するかのように国内の人口が増加し、同時に大学進学率も増加し、総体的に学生数が急増します。そのため、「大学設置基準」の施行以降、同志社の場合、敷地面積約11万㎡の今出川キャンパスでは２万人以上の在籍者を収容するキャパシティが既に限界に来ていたようです。この問題の解消法の一つが、１９８６（昭和61）年の田辺キャンパス（現・京田辺キャンパス）開校でした。このキャンパスには今出川キャンパスの約９倍の敷地があります。

このように、同志社は在籍者数が増加するにつれて土地を獲得し、必要な建築物を増築してきました。しかし、年々増加する在籍者、さらに科学技術の進歩などの原因が重なり、かつてはその機能性を期待された建築物も時間の経過とともにキャンパスにおける位置付けが変遷していきます。この過程を①「伝統」②「改新」の２つに分け、古写真を用いながら現存する建物の歴史的位置づけを考えます。

①「伝統」

「伝統」と位置付けられる建物は、主に重要文化財に指定されている⊠瓦建造物です。いずれも１８８０年代から１８９０年代に完成した建物ですが、国に文化財としての価値を認められています。一事例として、礼拝堂（写真１および２）と彰栄館（写真３および４）の新旧の写真を並べました。創建当時とはずいぶんと周りの風景が変化しています。しかし、いずれも今出川キャンパスを象徴し続けている⊠瓦建造物です。彰栄館は今出川キャンパスで最初の⊠瓦建造物であり、最初の本格的な教室棟であったと考えられます。その後も長く教室として使われていたと考えられます。また、礼拝堂は創立者新島襄が「同志社の礎」になると称えた建物です。その役割は普遍です。これらは今出川キャンパスの歴史を代弁する「伝統」の代表例です。

同じく「伝統」を体現するカテゴリーに含まれますが、その機能性から様々な用途に使用され今日まで残っている建物の代表例として、歴代図書館を紹介します。

創立以来、同志社で初めて図書館もしくは図書室の機能を持った場所は、新島襄の私邸の書斎と思われますが、今出川で最初にこの機能をもった建築物として建設されたのが書籍館、のちの有終館です（写真５）。有終館には図書室があり、新島襄が執務する部屋があったとも伝えられています。１８８７（明治20）年の完成です。有終館はその竣工当初しばらくは、在籍者の利用に対応可能な機能を有していたと考えられます。しかし、完成から25年後には高等教育機関として大学が開校し、その９年後には更に進んだ帝国大学と同種の大学が開校します。書籍館が完成して30年間ほどで、同志社内の学問レベルも在籍者の規模も飛躍的に拡大しました。そうした学問レベルの保証となる２代目の図書館が１９２０（大正９）年に新設されます。現在の啓明館です（写真６）。啓明館は本館と書庫棟に分かれており、書籍館の蔵書数をはるかにしのぐキャパシティを備えていました。啓明館が完成した年代から考えて、大学令による同志社大学開校のシンボルであると私は個人的に称しています。ところが戦後になりますと、図２のグラフからも明らかなように、戦前とは比べ物にならないほど大学の在籍者数が急増し、図書館もこの変化に対応する必要がありました。そこで、第３代図書館として１９７３（昭和48）年に完成した図書館が、現在の今出川図書館です。この時点で啓明館はおよそ50年に及ぶ大学図書館としての役割を終えました。なお、初代と２代目の図書館は役割を終えた後も、書籍館は有終館として教室や事務棟として利用され、啓明館も事務棟として利用され続けています。両方ともに現在は国の文化財として指定されています。今ではそれぞれの建物の機能が当初とは変わったため、全てが往時の姿を残しているわけではありませんが、いずれも「伝統」を体現している建物です。

②改新

次は、これまでとは逆に、残らなかった建物を紹介します。かつて、現在の図書館の場所にはいくつかの建物がありました。写真７と８の２棟はその場所にあった建物です。写真７が啓真館です。啓真館は戦後直後の１９４６（昭和21）年まで、華族会館分館として利用されていましたが、この年にＧＨＱ（General Headquarters, 連合国軍最高司令官総司令部）に接収されます。そして、接収未解除のまま、１９５２（昭和27）年に同志社が華族会館からこの建物と土地を購入し、建物は啓真館と名付けられました。今では今出川通りに面した門だけが残っています。この門には今も同志社大学大学院という看板が掲げられていますが、１９５２年の接収解除後すぐに、新制同志社大学の大学院専用の建物として利用され始めました。

また、この啓真館の北側に、聚芳館（しゅうほうかん）という建物がありました。写真８です。聚芳館は１９２２（大正11）年に建設されましたが、戦後の新教育制度下で誕生した夜間の中等教育機関である同志社商業高等学校の専用校舎でした。これら２つはいずれも戦後の新教育制度下の同志社教育を象徴する建物でしたが、図書館建設のために解体されました。特に啓真館は明治以降の京都の公家の伝統文化を体現してきました。また、購入の際には同志社をあげて購入のための募金活動が展開されたほど、同志社で望まれた建物でもありました。しかし、建物単体に価値があったとしても、キャンパスに新陳代謝が求められ、改新されました。このように、機能的な陳腐化、老朽化から文化財の価値とは別の理由で戦後はキャンパス内で改新が続きます。

啓真館や聚芳館と同じように改新が行われた事例として、学生会館が挙げられます。最初の学生会館は木造２階建てで、１９２７（昭和２）年に現在の至誠館がある位置に建てられました。建設資金には学生とその父兄、卒業生、教職員らの寄付が充てられました。寄付者層から、同志社の教職員及び卒業生らの交流の場として期待されていたことが窺えるでしょう。この学生会館の１階には食堂があり、２階は当時の学友会が利用していたようです。事実、初代の学生会館は学友会が管理していました。しかし、４年後の１９３１（昭和６）年に厨房からの失火で初代学生会館は焼失してしまいます。すぐに再建が検討され、管理は学校が行うことを前提として、翌年１９３２（昭和７）年に同じ場所に２代目の学生会館が再建されました。写真９です。前回の失火の原因を考慮して、館内に炊事場を含めませんでした。この２代目の学生会館は戦後も残りましたが、１９５３（昭和28）年に学生会館の機能を含めた大学会館（学生会館）、写真10が現在の室町キャンパスに建設されると、その機能が移り２代目の学生会館は１９６６（昭和41）年に取り壊されて、その跡地に至誠館が建設されました。その背景には、既に述べた、戦後の在籍者数の急増があると考えられます。しかし、大学会館も２００３（平成15）年ごろに解体され、その機能は２００２（平成14）年に新町キャンパスに新築された学生会館に受け継がれました。このように、在学生が主体的に関わる建物を事例にしてみても、学校を取り巻く環境、激増する在籍者数、多様化する課外活動とその関連団体の増加などに対応するためには改新の必要性が出てきます。

おわりに

かつて、今出川キャンパスには様々な建物が存在していました。こうした建物はその建物の価値の有無に関係なく、学校を取り巻く環境の変化に対応するために改新されていきました。現在の価値観から考えれば、失われた文化財的価値に失望の念を隠せないケースも存在します。しかし、当時の状況を考慮すれば、必要な判断だったのかもしれないと考えることもできます。ただし、同志社のスクール・アイデンティティの形成には１４０年以上かけて醸成されてきた歴史と伝統が寄与すると考えています。この歴史と伝統を、最も直接的かつ具体的に示すキャンパスの風景をどのように保持し、発展させるかというキャンパス・ポリシーを明示することが、伝統保持とその改新への理解を得るためには不可欠と思います。今後も伝統と改新の間での⊠藤は続いていくでしょう。

【参考文献】
・河野仁昭　『キャンパスの年輪―同志社今出川校地―』　同志社大学出版部、１９８７年
・拙論　「研究ノート　初期の同志社生協史に関する一考察―購買部の動向に着目して―」　『社会科学』82、同志社大学人文科学研究所、２００８年11月
・パンフレット　『同志社の文化財建築物』　同志社社史資料センター、２０１６年
・学校法人同志社が発行する各年度の事業報告

２０１９年６月７日　同志社スピリット・ウィーク春学期
今出川校地　「キャンパスめぐり隊」記録

※図の表示はホームページでは省略します。